

報告 2 : 森久男 (愛知大学)

蒋介石の対日抗戦戦略の再検証

蒋介石の対日抗戦戦略を体系的に説明した公式戦史 (蔣緯国編『抗日禦侮』国民革命戦史、第三部、全十巻、1978年) は、中国軍・日本軍双方の立場がかなり客観的かつ公平に分析されている。しかし、蒋介石の対日抗戦戦略の評価にあたって、彼に不利な情報が正確に記述されていないという欠陥がある。

蒋介石の対日抗戦戦略は、大別して国家戦略・大戦略 (連盟戦略)・野戦戦略に区分できる。第3の野戦戦略は、「空間によって時間に換える」戦略と呼ばれ、中国の長期持久戦略の指導思想として位置づけられている。

1937年7月7日の盧溝橋事件後、11日の現地停戦協定は両国中央政府がともに支持せず、月末までに日本軍は平津地区を占領した。蒋介石は日本軍が平漢線に沿って南下し、抗戦体制が一気に崩壊するのを防ぐため、第二・第三戦線として平綏路東段抗戦と淞滬会戦を主導的に発動し、作戦ラインを平漢線に沿った南北方向から、長江に沿った東西方向へと変更しようとした。

平綏路東段抗戦は、支那駐屯軍と関東軍をチャハル省へ引き込むのが目的で、内外長城線を利用した山岳陣地戦で日本軍に出血を強いた。他方、蒋介石は「持久消耗戦略」に基づいて、淞滬会戦 (上海作戦) の作戦指導を行ない、ドイツ装備の中央軍の嫡系精鋭部隊を次々と前線に投入した結果、上海撤退から南京城攻防戦にかけて、それらの大半を喪失している。蒋介石の上海・南京における作戦指導方針は、一般に理解されている彼の長期持久戦略とは根本的に異なるものであった。

本報告の課題は、日中戦争初期における蒋介石の対日抗戦戦略の意義を検証するため、平綏路東段抗戦と淞滬会戦における作戦指導を比較しながら、国民政府軍の主要な抗戦戦術である陣地戦に焦点を合わせて、彼の戦争指導の特質を検証することにある。